静岡福祉大学
学報
2011.8 No.11
しずおか福祉
〒425-8611 静岡県焼津市本中根549番1　TEL.054-623-7000　FAX.054-623-7453　http://www.suw.ac.jp

静岡県内トップの成績 社会福祉士 合格者数と合格率！

過去の問題から出題されたKey wordを徹底分析！ 学生に情報提供と応援を！

この1月に国家試験が実施され、3月に発表された社会福祉士では国家試験合格率及び合格者数で静岡県内トップの成績を収めました。

当然ながら学生の皆さんの努力があるからです。

学生たちは過去の問題を何度も解きコツコツと勉強を重ねました。1月には特別対策講座を実施し、苦手科目を中心に外部講師を招き「ファイナルチェック」を行ないました。学生たちが講師による講義に耳を傾け、真剣にメモをとり「理解すること」「覚えること」を繰り返しながら得た成績でした。

でも!!! それだけでは、県内1位はとれないんです!!!

国家試験対策のベテラン
長坂和則先生

本学は、去年から、特別な先生をお迎えしました。

それが、現在、福祉心理学科　准教授の長坂和則先生です。にこやかで、とってもやさしい先生と大評判です。

先生は、受験対策のベテランだからこそ、いろいろな対策を考えてくれました。

今年もいよいよ始まりました！ 国家試験対策 1位維持を目指して!!

今年度も、昨年度の成績を維持すること、そして、さらに向上すべく、4月下旬から模擬試験を開始し、5月中旬には国家試験対策プレ講座を実施しました。

プレ講座では、先輩の体験談として勉強の仕方で不安になったこと、わからなくて悩んだこと、試験会場で緊張したことなどを具体的にきき、さらには就職についてもアドバイスをもらいました。学生たちは先輩たちがやってきたことをイメージしながら聞き入りました。午後からはこの時期に大切なものとして、国家試験に向けた勉強方法が説明され、国家試験に出題されているキーワードが担当教員からわかりやすく解説されました。

そして、今年も5月末から本格的な国家試験対策講座が開催されています。

学生たちはこの国家試験対策講座を受け問題を解きながら実力をつけていき、勉強を積み重ねていきます。

国家試験に合格し、国家資格というライセンスをもって、この大学で培った「福祉力」を発揮する専門職としての活躍を期待しております。

本学国家試験合格率	（　）内は全国合格率
社会福祉士	42.3%（28.1%）
精神保健福祉	62.5%（58.3%）
ダブル合格	75.0%

昨年度の本学における国家試験受験者の新卒者の合格率
※ダブル合格とは、社会福祉士・精神保健福祉士の両方を受験し合格した者をいう

長坂和則先生の今までの著作

活躍する卒業生

立命館大学大学院に進学した熊本淳さん

Ⅰ．はじめに

『チャレンジ』、この原稿を書きながら、学生時代以降の生活を振り返る時に浮かんできた言葉です。もしかしたら私を知っている方は『無謀な』や『まわりをヒヤヒヤさせる』を頭に付けた方が、より納得といったところかもしれません。そのいくつかの『チャレンジ』には多くの同友との出会い、同志の存在がありました。その事について、少しご紹介させていただきます。

Ⅱ．大学入学と精神保健福祉士への道のり

「ヨッシャー!!」合格の文字を見て、そう叫んだことを鮮明に覚えています。

私は、北海道函館市に生まれ、高校ではいわゆる中途退学を経験し、定時制高校で4年間の学校生活を過ごしました。そこでは、クラス仲間や先輩後輩、教職員等から人の温かさを、仕事と学校の両立や定時制への偏見から社会の厳しさを肌で感じました。当時の経験が、私の福祉と教育への関心の原点・根の部分になっています。

4年生の時、精神保健福祉に詳しい教員や保護観察所の社会復帰調整官との出会いにより、「精神保健福祉士」取得を目指しました。その時、偶然手に取った大学の紹介本が「しずふく」との出会いでした。地元を離れて自分の力を試したいと思い、新規に開校した大学に魅力を感じ、受験しました。

立命館大学キャンパスにて

大学生活における最大目標は「精神保健福祉士」の合格でした。学習不足からソーシャルワーカーの具体像が描けず、将来性の不安等から、挫折しそうな時期もありましたが、同志や先生、地域関係者の支えが意欲の高めてくれました。事実、国家試験前の模擬試験結果では「一発合格は極めて難しい」との判定でしたが、大学図書館等で2ヶ月間（人生初の）猛勉強をしました。「精神保健福祉士」に合格した際は、再び「ヨッシャー!!」と喜びを爆発させました。

また、2004年当時より、静岡県精神保健福祉ボランティアの中心的存在であった方との出会いから、焼津で行われているメンタルヘルスサロン「ととろ」でのボランティア活動を約4年間継続させていただきました。ケアしたいという思いで参加したつもりが、ケアされている自分もいるという気付きもありました。更に非専門家であるボランティアの関わり方等から学ぶことがあり、卒論のテーマとしました。こうしたつながりを通じて、学生が中心となり卒業生や教職員、地域関係者らと共に精神保健福祉を継続的に考えていきたいと考え、本学山城厚生教授、吉永洋子助教と相談を重ね、「ととろ」への参加学生と共に2006(平成18)年、静岡福祉大学精神保健福祉研究会【くるる】設立の会開催に至りました。私としては、一緒に考えたい、卒業後もつながっていたいと思える仲間の存在も重要でした。現在も後輩中心に研究発表や実践を継続していることは何よりの喜びです。

その他、高等学校教諭一種免許状「福祉」、ホームヘルパー2級を取得し、無事卒業することができました。

Ⅲ．目標だったスクールソーシャルワーカーへの挑戦

卒業後、山城教授が責任者であります「ハートケアセンターこころ」でソーシャルワーカー（以下ワーカー）としてスタートを切りました。学生ボランティア活動の中で、目指すべきワーカーの存在、そして利用する方や関係者との関わりから、人間性を高めていける環境と思い、就職を志願しました。スタッフとして短い関わりとなり、力不足から不十分な点がありましたが、目の前の人を大切にする（される）視点や支える人達の情熱を実感しました。

2008（平成20）年、静岡県教育委員会スクールソーシャルワーカー（SSW）として島田市の小中学校を担当させていただきました。スクールソーシャルワーク元年と言われたこの年は、私自身のワーカー元年でもあり、専門職ながら、ソーシャルワークとは何かという考えを持ち合わせないまま、教育現場へ足を踏み入れました。また、知識・技術が未熟であると感じたため、市教育委員会（以下市教委）や教育センター等の関係機関へ可能な限り足を運び情報交換と方向性を確認し、それに沿った活動しました。市教委の理解と積極的な推進もあり、島田市は県内初、市単費のSSW予算獲得に至りました。

また、精神保健福祉士全国大会で、3年連続学会発表し、島田市のSSW

実践を、データからの考察や活動例を挙げながら報告しました。簡単な試みではありませんでしたが、毎年の活動をまとめ、質疑での応答や他の発表者とのつながりができるという貴重な体験をさせていただきました。

その他、スキルアップのため、愛知県の専門学校通信制過程へ2年通い、今年社会福祉士の登録を行いました。

Ⅳ．これからの挑戦

現在、立命館大学大学院社会学研究科に所属しています。学部からの進学、社会人、留学生が在籍し、福祉以外の分野を研究テーマとしている院生が半数以上います。このような環境で、今までの経験が主な判断価値であるいわゆる「経験論」でしか支援できていなかったのではないかという自己反省も含め、理論を学習し、わかりやすく説明できる伝える技術を身につけていきたいと考えています。これは修士論文作成にも通ずることだと認識しています。

今日、全国民が通う学校への関心は高いと言われています。私がアシスタントを担当している「スクールソーシャルワーク論」は300名近い学生が受講し、非常に関心が高いことを物語っています。このようにSSWに関心がある、または目指す学生が学べる機会の提供を「しずふく」に期待しています。

新任紹介

本年度、新たに5名の先生が加わり、ますます教育体制が充実してきました。これまで様々な分野で活躍されてきたパワフルな新任の先生方をご紹介いたします。

福祉心理学科

徳山美千代教授

専門

発達臨床心理学、教育心理学。

研究

児童養護施設の被虐待児童のケアに関する研究および養育者と子どものアタッチメント関係に関する研究、プロジェクトアドベンチャーの手法を用いた教育実践に関する研究

抱負

臨床心理士としての実践体験や臨床研究などから得たものを皆さんと共有し、それぞれの仕事や生き方に少しでも反映していただければと思います。

メッセージ

諦めることなく、自分のやりたいことに向かっていって欲しいと思います。失敗することは悪いことではありません。失敗から学ぶという考え方を取り入れていきましょう。

山田美津子教授

専門

社会事業史、社会福祉政策（特に北欧諸国）、子どもの福祉。

担当科目

子ども家庭福祉、少子化社会と社会福祉

メッセージ

〝冷たい頭と熱い胸〟これはマーシャルという経済学者の言葉ですが、私の大学時代の恩師である一番ヶ瀬康子先生が「社会福祉を勉強する人は『冷たい頭と熱い胸』でのぞむように」と教えてくださいました。「冷たい頭と冷たい胸」でも「熱い頭と熱い胸」でもだめ、しかしもし、どちらか欠けるとしたら冷たい頭が欠けた方がまだしもいい、とおっしゃいました。私はこの言葉をときどき思い出し、この言葉の持つ意味を実感しながら仕事を続けてきました。そして今、学生の皆さんにこの言葉を伝えたいと思います。

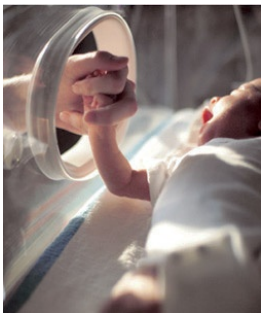
医療福祉学科

飯嶋重雄教授

担当科目

医療概論、医療概論、人体の構造と機能及び疾病、臨床医学

私は、3月まで東京の病院で働いてましたが、4月から本学に赴任し、1年生に対して医学に関する講義を行っています。これまで小児科一筋であり、医学全般の講義は初めての経験です。作りおきの教材は全くないため講義用スライドや配布資料を一から作らねばならず、毎日必死で教材づくりを行っています。さて、私がこれまで携わってきた新生児医療についてご紹介いたします。この分野は私が医師になってからこれまでの間に著しく進歩しており、昔は全く助からないとあきらめられていた出生時の週数22－23週、体重400－500gでも元気に育つようになってきました。しかしその一方で、様々な後遺症をもつ子や、就学の問題、両親の離婚や虐待等家庭の問題も増えていることも事実です。こうした問題に対して現在では、臨床心理士が出産前か



ら母の心のケアを行い、児の退院にあたっては病院のケースワーカー、地域の保健師や状況によっては児童相談所の社会福祉士もかかわり、重い後遺症をもった児に対しては看護師の他、理学・作業療法士や介護士による在宅ケアが行われています。小さく未熟な赤ちゃんを助けるために医師や看護師が不眠不休でがんばるだけの時代ではなくなっており、コ・メディカルスタッフのニーズが非常に高まっているにもかかわらず、その数が追いついていないのが現状です。本学のような福祉系大学から新生児医療・小児医療にかかわるスタッフが少しでも輩出できれば幸いです。

吉田輝美講師

担当科目

相談援助演習、相談援助実習指導、社会福祉援助技術現場実習指導

この4月に着任いたしました吉田輝美と申します。よろしくお願いいたします。私の専門は高齢者福祉領域です。介護保険制度や介護サービスの人材育成をテーマに取り組んでいます。

今年の3月まで仙台で生活し、大学で福祉人材の養成をしながら、常に実践者であり続けたいと、介護支援専門員として在宅の認知症の方のケースを担当したり、宮城県社会福祉士会に所属し、成年後見人の仕事をしたりしてきました。この二つの仕事は、私にソーシャルワークの在り方を対極的に教えてくれるものでした。最近は「その人らしく」という言葉が、よく出てきます。言葉でいうことはたやすく、そのことをどのように具現化するかが、ソーシャルワークの醍醐味だと感じています。その方法は無限にあり、その答えも無限なのです。ソーシャルワークは「わかった」だけではいけない、いかに「できるか」だということが私の持論です。

この度の東日本大震災において、私も避難所生活をし、生きることや家族について考えさせられました。「奪い合えば足りなくなり、分け与えれば余るもの」という先人の教えがまさに目の前で繰り広げられるときでした。いつもは支援者である私が、支援される立場になったのです。改めて、支援を受けることの難しさを実感しました。

福祉とは一体何なのかと、現在も自問自答しています。これは、生涯にわたって問い続けていくものだと感じています。

健康福祉学科

野坂俊弥教授

担当科目

発育・発達論、健康科学概論、健康トレーニング論、スポーツ実習

健康福祉学科に着任いたしました野坂俊弥です。どうぞよろしくお願いいたします。福祉の分野で働くのは初めての経験ですが、学生たちは一様に優しく、大学全体がとても穏やかな雰囲気に包まれているためか、生来卑小な私もおおらかな気持で執務させて頂いております。

研究活動においては、習慣的な身体活動が動脈の加齢変化に及ぼす影響について運動生理・生化学的な視座から検討してきました。そこでは、日頃よく運動する人はそうでない人に比べてより柔軟で強い動脈を持っていることがわかってきました。ですので、お年を召した人たちにはもちろん若い人たちにも日常生活を活動的にするよう種々の場面でお勧めしているのですが、当の私自身は運動不足のために腹囲が着実に増えていっております。そのため運動実技系の授業ではなるべく学生たちと一緒に身体を動かすようにしているのですが、若さあふれる彼らについていくのはいささか骨が折れます。その若々しさを羨ましく思いながらも、彼らが日々成長する様子を目にするのが今の最大の喜びでもあります。さらには、その成長に教員としていかに関わることによって、高い専門性と可塑性を有するプロフェッショナルとして社会に送り出すか。おおらかな気持の一方で、気の引き締まる思いを感じている毎日です。

写真左より　吉田先生、徳山先生、山田先生、飯嶋先生
福祉創造館前にて。

保護が必要な子どもたち

～アニメ等に見る要保護児童と児童養護施設～

はじめに

今回の東日本大震災では多くの方が被災され、二万を超える人が亡くなったり、行方が分からなくなったりしています。また原発事故に関するテレビの報道も活発で、私たちが震災関連のニュースに触れない日はありません。

そのような中、五月二十四日現在で百五十人を超える十八歳未満の子どもたちが両親を失っているという事実を知っている人はどれほどいるでしょうか。新聞報道によれば、このような子どもたちの多くは親族の元に身を寄せていますが、中には、児童福祉施設に入所した子どももいるようです。

このように、親が亡くなるなどして育てることが出来なくなった子どもを保護する取り組みは児童福祉の原点といえます。ここでは、身近なアニメ等に描かれた子どもたちの状況を通して、保護が必要な子どもたちに何ができるのかを考えてみたいと思います。

アニメ「火垂るの墓」

この物語は、太平洋戦争末期、親を亡くした清太（十四歳）と節子（四歳）の兄妹が、子どもだけで生きていこうとするも果たせず、結果的に二人とも栄養失調で死亡するというものです。

一時的に身を寄せた親戚宅での酷い扱いや、生き延びるために畑から野菜を盗む場面などは、戦災孤児がおかれた実際の状況を如実に表現していますが、特に、ラスト近くでの節子の死と遺体を荼毘に付すシーンは衝撃的で、涙なしには見ることができません。

このことから、子どもは発達途上の存在であり、自分自身の命と暮らしを大人の手に委ねざるを得ない弱い立場にあることが分かります。

アニメ「タイガーマスク」

この物語は、孤児院（現在の児童養護施設）で育った伊達直人がレスラー養成施設「虎の穴」でプロレス技を身に付け、悪役レスラーとして稼いだ賞金を使い巣立った施設を支援するというものです。

昨年十二月から今年の一月にかけて伊達直人を名乗る人物から日本全国の児童養護施設にランドセルなどを寄付する動きが広がり、タイガーマスク現象（運動）と呼ばれました。

震災の影響もあってか現在では見られなくなりましたが、このことが児童養護施設の存在を広く認知させるきっかけとなり、施設の処遇を改善すべきとの機運も高めたのも事実です。

ミュージカル「アニー」

この物語は、世界大恐慌時代のアメリカ・ニューヨークを舞台に、捨て子として孤児院で生活する十一歳の少女が、施設での過酷な生活や親がいない哀しみにもめげず、やがて大富豪の養女になるというものです。

この中で、主人公のアニーは過酷な状況に堪えているというだけでなく、親が生きていると信じ、親を探しに行くため施設を脱走するという主体的かつ行動的な一面を見せています。

このことから、保護が必要な子どもたちは守るべき可愛そうな存在というだけでなく、能動的に働きかける権利の主体であることが分かります。

相原眞人教授（オープンキャンパス模擬授業風景）

おわりに

児童養護施設とは、保護者がいない、虐待を受けているなど、様々な理由によって家庭を奪われた子どもを入所させて保護・養育し、家庭復帰や自立を支援する児童福祉施設です。

現在では在籍児童の半数以上が被虐待児であるといわれており、心理的な課題を持つ子どもも少なくありません。

では、私たちに出来ることは何でしょうか。まずは、施設の存在を知り、生活する子どもたちの状況や思いに関心を向けることです。その上で何ができるのかを考え、遊び相手や学習の手伝い等、自分に出来ることを実行することが大切なのではないでしょうか。大震災を経験した今こそ、そのような行動が求められているのです。

（医療福祉学科教授　相原眞人）

東日本大震災ボランティアに参加して

健康福祉学科3年　北原　千夏

3月11日14時46分18秒・・・・この日から、私たちの生活は大きく変わりました。

月並みの言葉で、この事実を語ることできません。また、語るべきではありません。それは今でもこの瞬間もまだ、苦しんでいる方々がまだ何十万人にもいるからです。

福島では今でも原発を安定させようと大勢の方々が日夜、働いています。だからこそ、私たちは、真剣に自分のこと、家族のことを真剣に想うことが求められているのではないでしょうか。

4月末から5月の初め、ゴールデンウィークに本学から、16名の学生が岩手県に向けて震災後の復興ボランティアとして、2班に分かれて、それぞれ1週間の期間で派遣されました。彼・彼女らは、自費で片道10時間以上、バスに乗って現地に向かいました。

ようやく、バスから降りて、彼・彼女らがみたものは・・・・・

見渡す限りの瓦礫の山、ほとんどの建物は廃墟と化していたのです。

当然、事前の打ち合わせとは全然違う話が現地のボランティアセンターの要求、気温が5度以下という静岡とは、あまりに違う環境の中で必死にボランティアとして、働き続けてきました。その素晴らしい働きをしてきた、16人の学生のうち、3年生の2人の学生にその時の様子を書いてもらいました。

岩手県に到着したその日から5日目まで、岩手県下閉伊郡山田町の山田町ボランティアセンターを拠点とし、ボランティアセンターに届いた救援物資の仕分け作業や、山田町沿岸部を実際に自分たちの足で歩き在宅の被災者の方々へニーズ調査を行った。6日目は、

ボランティアセンターにて

最終日に行う日本ユニセフ主催の「2011年ゴールデンウイーク・ユニセフこどもバス」というイベントのボランティアに参加するに当たっての、施設の注意点や私達の言動の指導などの事前打ち合わせをし、最終日はそのイベントのボランティア活動を行った。

救援物資の仕分けでは、食料を賞味期限順に並べたり、衣類を新品・古着、男性物・女性物それぞれに分けたりした。食料では賞味期限が過ぎている物があったり、衣類では今の季節では必要の無い夏物が入ったりしていて、場所ばかり取ってしまって逆に被災地へ迷惑がかかっていると感じた。本当に必要な物が行き渡っていない現実を知った。物資なら何でも送ってしまうのではなく、需要のある物を送らなければ意味がない。ニーズ調査を行った際、今すぐに家の中の片付けを手伝ってほしいと言われ作業を行ったら、ボランティアセンターの方に、一度ニーズとしてセンターに届けなければ作業を行ってはいけないと注意を受けた。しかしニーズをセンターに届け、許可が下りるまで作業が出来ないということになると、その日にそのニーズの作業をすることは難しくなってしまう。実際に町内を歩き、リアルタイムなニーズを聞くことができるのに、すぐに作業が出来ないなんておかしいのではないか。ボランティアがニーズを聞くことができても、その対応をするまでに時間がかかってしまっては、被災者の方々にいつ対応してもらえるのか、ニーズを聞くだけ聞いてほったらかしにされているのではないか〟と不安を与えてしまう危険があり、実際そのような声もゼロではなかった。そのようなことから、ボランティアへの不信感が募ってしまい、ニーズ調査にお宅へ伺ってもニーズを聞くことが出来なくなってしまう。センターの作業をする際に、許可を出す権限のある人が一緒にニーズ調査へ行き、ニーズが出た際その場で作業が出来るか否かの判断をするというような体制にすれば、なぜ出来ないのか説明もその場でできるから被災者の方々の不安要素も少なくなると推測する。6・7日目の活動では、

撤去作業

被災地の子供とその保護者への言動の注意を学んだ。話のきっかけである出身地の質問も、被災地の子供並びに保護者には地震・津波を思い出してしまう要因になってしまう。全く地震・津波の話題に触れないというわけではなく、被災者が話したいことを話せる環境をつくり、子供たちが安全に元気よく遊べるような気配りが必要である。地震・津波の話を被災者からしてきたら、目を見てうなずきながら話を聞き、無理に話題を変えようとはせずに話し終わるまで心を寄せ合うように聞くことが大切だと考える。

山田町の状況が、行く前に思っていた自分がしたかった活動が出来るほどの状況ではなく、それ以前の問題がたくさんあり、今回のボランティアに参加し実際に現場に行って自分の目で見て、自分の耳で聞くことの重要さを学んだ。その現場に行かなければ、本当に求められているものは見えてこないし、本当のニーズには応えられない。実際に私は現場に行き、被災者の方々の声を聞くことが出来たのでこれから静岡で出来ることを探し、一人でも多くのひとに広げていきたい。

健康福祉学科3年　石川　莉紗

4月27日～5月4日の8日間、「しずおか学生ボランティアいわて応援隊」の一員として、岩手県山田町へ行き活動してきた。

活動内容としては、救援物資の整理・仕分け、在宅へ訪問してニーズ調査、がれき撤去作業、ごみ拾い、泥出し、等をした。又、5月3日にはユニセフ主催のゴールデンウィーク特別企画「日本ユニセフこどもバス」のボランティアで、動物園に行き、子どもたちの見守りボランティアをした。

子どもたちの見守り

この中でも、私はニーズ調査をすることが多かった。いくつかのチームにわかれ実際に在宅へ訪問し、コミュニケーションをとりながら困っていることや必要としていることなどを聞き出して、ニーズの把握をするのだ。数件のお宅を訪問してみて、「家があるだけでもありがたい。何も不自由していない」や「大丈夫です。何かあったら言います」というお宅が多かった。しかし一方で、すぐにやってほしいと言われ、掃除の手伝いや洗い物や家にたまった泥出しを頼まれ、その場でお手伝いをしたときもあった。洗い物をしたお宅では、「もう限界。洗っても洗っても終わらない。来てくれて助かりました」と言われ、もう少し早く来ればもっとたくさんお手伝いできて負担を軽減できたかもしれないと考えた。泥出しを頼まれたお宅では、「もう少し早く来てほしかった」と言われ、この地区にはボランティアが来ていなかったのだろうかと思い、申し訳ない気持ちになった。

ニーズ調査をして、家が多く残った所には集中して1ヶ月ほど前からニーズ調査が行われていたけれど、残った家が少ない地区や目につきにくい奥のほうにある地区にはボランティアが行き届いていないことがわかった。すべてのお宅には訪問できなかったが、まだまだボランティアを必要とする所はあるのではないかと推測する。又、他のチームの調査とも照らし合わせてみて、避難所に行ったわけではないのでなんとも言い難いが、津波の被害にはあったが家は残っている方のほうがニーズはたくさんあるのではないかと推測する。

それから、「この前、ボランティアの人に、水はけが悪いからせきを作ってほしいと頼んだが、それは行政の仕事だからの一点張りで、なにもしてくれなかった。だからもうボランティアには頼まない。」という人がいた。その方は、ボランティアの人を信用していないようだった。もし、最初に来た人が、行政に連絡しなんらかの対応をしていたら、その方も納得していたかもしれない。最初に信頼を得ることは、本当にとても大切だ。ボランティアセンターの方に、このことを報告したが、やはり「行政の仕事だから我々はできない」と言われた。確かに、行政にしかできないことはたくさんあると考える。しかし、やろうと思えばボランティアにもできることはあるはずだ。今回のようにせきを作ってほしいという依頼の場を例に挙げる。せきを作ることはできなくても、がれきやごみがたくさん流されてきているため、がれき撤去やごみ拾いならできると考える。そうすれば、行政もせきが作りやすくなると考える。

このように、これは行政の仕事と決めつけるのではなく、できるところまではボランティアがやるというふうに、ボランティアセンターと行政が協力してやればもっと効率がよくなると考える。以上のことが、ボランティアに参加して考えたことである。

平成24年度 保育心理コース設置について

社会福祉分野における国家資格には、社会福祉士、精神保健福祉士、介護福祉士と保育士があります。このうち、社会福祉士と精神保健福祉士の資格は本学において所定の単位を修得して国家試験に合格することによって取得できます。介護福祉士の資格は所定の単位を修得することによって国家試験なしに（近い将来国家試験の導入が予定されていますが）卒業と同時に取得できます。

さて、保育士の資格取得の方法ですが、二通りあります。一つの方法は保育士試験に合格すること、他の方法は厚生労働大臣の指定する保育士を養成する学校その他の施設を卒業することです。

本学は、今までは前者であって「保育士を養成する学校その他の施設」ではありませんでしたので、保育士資格の取得希望者に対して保育士試験に合格するようサポートしてきましたが、社会福祉の総合大学を目指す本学として子どもの福祉に携わる専門職としての保育士を養成する後者の方法を取り入れることになりました。今後は、本学において所定の単位を修得することによって卒業と同時に保育士の資格を取得できることになります。具体的には、平成24年度に福祉心理学科のなかに40名の保育心理コースを設けます。

保育士とは、「登録を受け、保育士の名称を用いて、専門的知識及び技術をもって、児童の保育及び児童の保護者に対する保育に関する指導を行うことを業とする者をいう」と児童福祉法第18条の4に定められています。また、同法では「保育士は、保育士の信用を傷つけるような行為をしてはならない」こと、「保育士は正当な理由がなく、その業務に関して知り得た人の秘密を漏らしてはならない。保育士でなくなった後においても同様とする」ことや「保育しない者は、保育士又はこれに紛らわしい名称を使用してはならない」ことを定めています。保育士は、このように法律で定められた資格であり、重大な責任を負う仕事をするのです。

保育士としての就職先の多くは児童福祉施設です。児童福祉施設の中で、施設数とそこで働く保育士の数が最も多いのが保育所です。そこでは保育士は、一人ひとりの子どもの発達を保障するという社会的にも重要な役割を担っています。最近は配慮の必要な子どもが増えてきており、とくに「気になる子ども」の対応に苦悩の声を上げている保育士もいます。児童養護施設の入所児童の6割は虐待を受けた子どもたちです。その心のケアのために心理の専門職が配置されていますがとても足りません。認定心理士の資格をもつ保育士がいたら児童にとっても施設にとっても貴重な存在となります。

本学の福祉心理学科では、ソーシャルワーカーである社会福祉士・精神保健福祉士の養成をおこなってきており、また、認定心理士の資格が取得でき、さらに、幅広い教養教育カリキュラムが設置されています。したがって、本学では、幅広い教養に支えられ、社会福祉に関する広い知識と相談援助技術に裏打ちされた、子どものこころを理解するに止まらず、保護者の抱える心理・精神保健的課題への対応能力をも備えた保育士の養成を目指しています。このような専門的視座を備えた保育士こそ今最も求められています。

編集後記

学報に掲載した記事のみならず、今、本学では学生の教育ニーズに応えるための様々な試みをしています。昨年、3年生対象の「教養講読」と4年生対象の「教養研究」を新設したのも、その一つです。一般教養の先生たちが自分の専門分野を活かして、専門書を読んだり、専門分野の研究をしたりしていこうという趣旨ではじめました。本学の専門科目である福祉や心理、医療、情報、介護などとはテーマが異なりますが、受講生たちの多様な問題関心の受け皿として有効な役割を担えるように設置しました。本年度前期の履修者数は「教養講読」が79名、「教養研究」が42名で、のべ総数121名でした。受講生の評価は高く、以下のような好意的な感想が寄せられています。

［自然科学］
＊小学校の理科の授業から挫折していたが、講義を通して天文などに少しずつ興味がでてきて、好きになってきた。
＊難しかったけれど勉強になり、もっと宇宙が好きになった。

［文芸批評］
＊村上春樹の本を読んだことがなかったのですが、授業を受けてとても興味をもつようになりました。
＊自分だけで読んでいたら、一人の作家に対してここまで深められなかったと思う。

［地域史］
＊静岡を見つめ直すことができて楽しい。
＊静岡に住んでいてもまだまだ知らないことが多いと思いました。

本学はこれからも、学生の多様なニーズに応えられる工夫と努力を重ねていきます。

（文責　小田部雄次）